

IUFRO-J NEWS

No. 138 (2025.7) —

森林・林業研究の国際的な交流について

森林研究・整備機構 中静(浅野) 透

はじめに

過去5年間、IUFRO-Jの議長を務めさせていただきましたが、今回、IUFROのInternational Councilの日本代表としても再任していただきました。今後とも、よろしくお願い申し上げます。ご挨拶を兼ねて、森林・林業研究の国際的な交流について、最近思うところを、述べさせていただきます。

IUFRO World Congress で感じたこと

昨2024年の夏には、IUFROの世界大会がストックホルムで開かれ、日本からも多くの方が参加されたと思います。私自身は、2004年から2009年にIUFROの理事もさせていただいたのですが、それ以来15年ぶりの参加でした。当時一緒に理事をしていたJohn Parrota氏が2024年まで会長をされていたり、事務局の方々にも当分の顔ぶれが残っておられたりということで、たいへん懐かしい思いで参加させていただきました。前号のIUFRO-J Newsにもあるように、世界各地から4000人を超える参加者があって、盛会だったと思います。

今回の世界大会で、私が印象的だったことは3つありました。そのひとつは、新しいIUFRO会長が、長いIUFROの歴史の中で初めての女性会長となったことです。新会長のDaniera Kleinshmitさんとは、一言二言しか話せなかったのですが、International Councilでのやり取りを見ていると、とても反応の早い、そして明確な自分の考えを持っておられる人だという印象を持ちました。DEI (Diversity, Equity, Inclusion) の重要性が謳われ

る昨今、とても意味のある人事だと思いました。

2つ目は、Bio-economy がとても重要なキーワードになっていたことです。Bio-economy とは生物資源（バイオマス）やバイオテクノロジーを活用して、持続可能な経済社会を実現する経済活動や考え方を指しますが、循環経済（Circular-economy, 資源を循環させて廃棄物を減らし、環境負荷を低減する経済システム）と組み合わせ、Bio-circular-economy という概念も使われます。いずれにしても、鉱物や化石燃料などを中心とした経済によって地球に負荷をかけてきた人間活動を、より持続性の高いやり方に替えてゆこうとする考え方です。私も数年前に北欧の研究者から誘われて、Bio-economy の研究集会に出たことがあり、ヨーロッパではかなり盛んになっていると聞いていたのですが、今回のIUFROでもプレナリーで紹介されていたほか、集会もいくつかあり、森林に関係した分野での盛況ぶりにすこし驚きました。日本の総合科学技術イノベーション会議でもキーワードのひとつになっていますし、森林や林業、林産業とも深く関係するので、今後注目度が増す可能性が大きいのではないのでしょうか。

最後の一つは、やはりプレナリーで紹介されていた、Forest Impact Fundです。インパクト投資は、近年SDGsなどでも注目されている投資で、経済的な見返りと同時に、社会的・環境的なインパクト（変化や効果）を作り出すことを目的としています。途上国の社会的問題や、気候変動や生物多様性などの解決に用いられる経済的メカニズムとして注目されていることは知っていました



写真-1 木製の IUFRO マーク。高さ 2m くらい。

が、森林を対象として実際に大規模な投資が動いていることには驚きました。プレナリーでは、パラグアイで実際に行われている例が紹介されていましたが、イギリスを中心とした 2 億ドルの投資により、3000 人を雇用し、保全地域を作りながら 8 万 ha に 6000 万本のユーカリを植えているということです。企業や投資機関が、環境や社会問題への影響について情報開示を求められている状況の中で、こうしたプロジェクトの在り方は、もっと注目されるようになるのではないかと思いますし、日本の森林やその経営についても大きな示唆を与えてくれるように思います。

国際的な発信と交流の活性化

新型コロナウイルスの影響で国際学会への参加機会が極端に減りました。そのことによって、国際的な研究の流れに直接触れる機会も失っていたことの意味を、今回の IUFRO 世界大会で改めて実感しました。オンラインでも会議はできるし、インターネットでいろいろな資料も読めるのですが、やはり生身の研究者や実践者の話を聞くと、その迫力や面白さに対して興奮し、それが大きなモチベーションになることを、久しぶりに思い出しました。個々の分野の集会でも、直接会う事の大きな意義を感じられた人は多いのではないかと思います。

実は、私が最初に国際会議に参加したのは 40 年くらい前で、場所はこのスウェーデン（ウプサラ）でした。その時は、英語も未熟で質問に対してまともに答えられなかったこと、それから、その時の経験が、その後の研



写真-2 展示会場におけるセッションの様子。毎日、いろいろなテーマでセッションが行われていた。

究や国際的交流に関するモチベーションになったことを思い出しました。あらためて若い人たちは国際会議に積極的に参加してほしい、と思います。日本国内の学会でも学ぶことは多いですが、国際学会での議論の多様さと先進性は若い研究者ほど、刺激になると思います。

そのうえで、今回も感じたのですが、日本の中での研究成果や議論は、国際的にリードしうる内容を持っていても、まだあまり知られていないものが多いと思います。もっと積極的な発信を心掛けるべきだと感じました。大規模な国際会議で存在感を示せば、日本国内の新しい動きを大きな国際的トレンドに発展させることもできるでしょう。自ら国際的な動きの中に身を置き、そのコミュニティで認めてもらえないと、国際的なトレンドを形作る集団の一部になるのは難しいです。一方、小さな集会でも、個々の分野をリードすることや、共同研究への発展も期待できます。日本国内の特殊な例だと思っても、意外に他の国との共通性や比較材料があって、興味を持ってくれる研究者は、思っている以上に多いと思います。自信をもって発信してもらいたいと思っています。

IUFRO-J では、金額は大きくないけれど、国際会議への参加や、国内での国際集会開催の助成をしています。近年は、応募があまり多くないのが気になっているところです。ぜひ利用していただいて（特に若い研究者のみなさま）、研究や成果の国際発信を進めてさせてもらいたいと思っています。

第 64 回 IUFRO 拡大理事会報告

東京大学大学院農学生命科学研究科 尾張敏章

はじめに

2025 年 5 月 21 日から 22 日にかけて、オーストリア・ウィーン市にあるウィーン応用美術大学において、第 64 回 IUFRO 拡大理事会が開催された（写真-1）。会議は対面とオンラインのハイブリッド形式で行われ、拡大理事会メンバーおよび IUFRO 本部スタッフなど約 60 名が参加した（うち 8 名はオンライン参加）。参加者の約半数は女性であり、ジェンダーバランスの取れた構成であった。

筆者は、第 1 部会の副コーディネーターとして本会議に出席した。本報告では、会議で取り上げられた主な議題について記述する。

1 日目（5 月 21 日）

会議の議長は IUFRO の Daniela Kleinschmit 会長が務め、開会にあたり同会長およびオーストリア農林・気候・環境保護・地域・水資源管理省の Elfriede Moser 林業・地域局長より挨拶があった。その後、出席者全員による自己紹介が行われた。

続いて、前回拡大理事会の議事録が承認されたのち、Kleinschmit 会長および Alexander Buck 常任理事より、2024 年 6 月の会合以降の活動報告がなされた。会長からは、IUFRO 内部での活動に加え、資金提供機関や連携団体との会合、また国際的な政策決定プロセスへの関与状況などについての説明があった。Buck 常任理事からは、オーストリア政府による資金支援は継続されている



写真-1 IUFRO 拡大理事会の様子（尾張敏章撮影）

る一方で、ドイツ政府が財政上の理由により支援を停止したことなど、資金調達に関する課題が共有された。また、加盟機関および準会員の新規入会・退会についての提案がなされ、承認された。

次に、Woodam Chung 副会長より、部会構成に関する報告があった。現在、IUFRO には 9 つの部会、61 の研究グループ（RG）、180 の作業部会（WP）が存在し、総役員数は 958 名である。このうち、男性およびヨーロッパ出身者がそれぞれ約 60%、42% を占めている。会議では、ジェンダーおよび地域別の役員構成比率がグラフで示され、役員の多様性確保が重要課題として共有された。

また、各部会のコーディネーターより、過去 1 年間の活動について報告があった。日本で開催された国際会議としては、第 5 部会より「ワールド・ウッド・デーシンポジウムおよび第 7 回 IUFRO 森林製品文化コロキウム」（2025 年 3 月開催）、第 7 部会より IUFRO 合同会議「森林における食葉性昆虫、侵入性害虫、昆虫・病原菌の生物学的防除に取り組むための理論と実践」（2024 年 8 月開催）が紹介された。今後の主要会議として、第 4 部会の全体会議が 2027 年 5 月にトルコ・アンタルヤで、第 9 部会の全体会議が 2025 年 10 月に中国・北京で予定されている。

Elena Paoletti 副会長からは、タスクフォース（TF）の現状について説明があった。現在 IUFRO には 13 の TF が設置されており、その詳細は IUFRO の公式ウェブサイト（<https://www.iufro.org/our-work#task-forces>）にて確認できる。各 TF のコーディネーターからは、メンバー構成、この 1 年間の活動実績、今後の計画について報告があった。参加者からは、部会と TF との連携強化などに関する意見が寄せられた。

続いて、Buck 常任理事より、IUFRO における特別プログラムおよびプロジェクト（SPPs）に関する報告があった。まず、科学-政策プログラム（SciPol）、能力開発プログラム（SPDC）、および世界の森林・社会・環境（WFSE）について、それぞれのコーディネーターから活動実績と今後の計画が報告された。この中で、WFSE のコーディネーターである Pia Katila 氏の退任に伴い、後任として Linda Rosengren 氏が選出された。

Report on the IUFRO 64th Enlarged Board Meeting

OWARI Toshiaki, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

さらに、特定目的プロジェクトである「森林のための提携 (TU4F)」, 「ヨーロッパ木材政策プラットフォーム (WoodPoP)」, 「地球のための木材 (Wood for Globe)」から、それぞれ活動状況の報告がなされた。また、新規プロジェクトとして、科学-政策連携の地域展開を目指す「地域科学-政策情報ネットワーク (SPIN)」の設置が提案され、承認された。SPIN はまず、汎ヨーロッパ地域およびアフリカ地域で展開され、将来的には南米など他地域への拡大も検討されている。

会長指名役 (PN) からは、アフリカ、アジア、中国、南米、オセアニアとの連携に関する活動報告があった。この中で、中国林業科学研究院 (CAF) の Lijuan Cui 副会長から、中国において若手研究者が IUFRO の役職により多く参画できるよう、CAF において促進方策や経済的支援を制度化した旨が紹介された。現在、中国からは理事会メンバー 2 名、拡大理事会メンバー 5 名、加えて 20 名以上が RG・WP の役員を務めている。

戦略的パートナーシップおよび国際協力に関する議題では、オブザーバとして出席した国際森林学生協会 (IFSA) および国連食糧農業機関 (FAO) より、それぞれ IUFRO との連携活動の現状および今後の計画について報告があった。IFSA の Theresa Klara Loch 会長からは、日本に IFSA の地域委員会が新設されたことが紹介された (筆者注: Loch 会長に確認したところ、これは九州大学支部「IFSAQ」であるとのこと)。一方、アジア太平洋持続可能な森林管理・再生ネットワーク (APFNet) は、代表者が欠席のため報告はなかった。また、前回の拡大理事会で提案された「IUFRO 役員による国際政策決定プロセスへの関与状況の可視化」に関しては、個人の活動をどの範囲まで IUFRO の公式活動とみなすべきかについて、さらなる検討が必要であるとの意見が示された。

IUFRO 本部からは、2024 年の年次会計報告、2025 年の補正予算案、および 2026 年の予算案が提出され、いずれも承認された。2024 年の本部収入は 1,015,802 EUR (1 億 6,500 万円)、支出は 1,098,317 EUR (1 億 7,800 万円) であり、結果として 82,506 EUR (1,300 万円) の支出超過となった。2025 年の補正予算案には、オーストリア政府公務員に準じた 3.5% の給与増による人件費の上昇が反映されており、この増額分は同国政府からの拠出金で補填される見込みである。2026 年にはさらなる給与上昇が見込まれている。加えて、特定目的資金を柔軟に管理・活用するための「戦略的会計」の設置が提案され、承認された。なお、詳しい説明はなかったが、オーストリア政府による IUFRO 本部への資金支援は、

「オーストリアを国際的な本部および会議開催地として強化するための連邦法」に基づいて行われているようである。

最後に、第 26 回 IUFRO 世界大会組織委員会 (COC) の Fredrik Ingemarson 委員長より、同大会の最終報告が行われた。本大会には 110 か国から 4,204 名が参加し、1,607 件の口頭発表と 1,471 件のポスター発表が行われた。参加者の 43% が女性、18% が学生であった。大会の収入および支出はともに 4,298 万 SEK (約 6 億 1,600 万円) であり、収入の約半分を参加費が占めた。この参加費の一部は、ライセンス料として IUFRO 本部へ納付された。

大会準備当初は、COVID-19 の影響により対面開催の可否が不透明であったため、複数のシナリオを想定して準備が進められた。財政面でのリスクが懸念されるなか、収入の見通しが立ったのは大会の約 1 年半前であったという。大会期間中は SNS を活用した広報活動が効果的に機能し、特に若手参加者による積極的な情報発信が大会の認知拡大に寄与したとのことであった。大会の公式ウェブサイトは、次の世界大会が開催される 2029 年まで公開が継続される予定である。

2 日目 (5 月 22 日)

会議冒頭では、Kleinschmit 会長より、前日の議事内容の振り返りが行われた。続いて、第 27 回 IUFRO 世界大会組織委員会 (COC) の Jane Njuguna 委員長より、同大会の準備状況に関する報告があった。第 27 回世界大会は、2029 年 8 月 5 日から 11 日まで、ケニア・ナイロビのケニヤッタ国際会議場 (KICC) にて開催される予定である。なお、ケニア森林研究所 (KEFRI) の IUFRO 委員会メンバーが 2024 年 11 月に JICA を訪問し、JICA から大会開催への支援の意向を表明されたとの報告もあった。

また、第 27 回 IUFRO 世界大会科学委員会 (CSC) の Ernest G. Foli 委員長からは、現在 19 名いる委員の構成と、今後の主なスケジュールについて報告があった。大会のタイトルおよびテーマは 2026 年 2 月に決定され、セッション提案の締切は 2027 年 3 月、講演要旨の提出締切は 2028 年 6 月に設定される予定である。開催形式については予算の都合上、対面のみの開催が見込まれている、開会式や基調講演のライブストリーミングの可能性について意見が交わされた。また、TikTok セッションの新設についての提案もあった。

次に、表彰委員会 (HAC) の Don Hodges の委員長より、表彰制度に関する検討状況の報告があった。現在、

IUFRO の各賞は個人を対象としているが、今後は組織・団体も対象とするかどうかについて議論が進められている。また、優秀博士研究賞の授与頻度を5年に1度から増やすことも検討されている。加えて、特別功労賞の受賞者として、Fredrik Ingemarson 氏（スウェーデン）と Lidija Zadnik-Stirn 氏（スロベニア）の2名が推薦され、承認された。

続いて、Andre Purret 副常任理事より、国際評議会（IC）に関する報告があった。現在、IUFRO には120か国の機関または個人が加盟しているが、そのうちICメンバーが存在するのは62か国にとどまっている。ICメンバーがいない国の加盟者に対して本部から連絡を行っても反応が得られないことが多く、今後のICメンバー拡充の方策について課題が共有された。

戦略的課題に関しては、まず Chung 副会長より、多様性・公平性・包括性（DEI）委員会の進捗報告があった。同委員会における集中的な議論によって作成された多様性・公平性・包括性の定義と7つの原則が文書として提案され、承認された。IUFRO 役員向けに DEI 関連のウェビナーの実施や、オンライン教材の整備についても意見が出された。

続いて、出版委員会の John Parrotta 委員長とメンタリシップ委員会の Kleinschmit 委員長からそれぞれ報告があり、付託事項（ToR）の提案が行われ、承認された。

戦略委員会の Mónica Gabay 委員長からは、戦略行動計画 2025～2029 の策定状況について報告があった。新たな行動計画では、3つの目標、9つの目的、41の行動案が提示され、前回の計画（2020～2024年）で掲げられていた55の行動より簡素化が図られている。計画に対する実績の報告方法や様式について多くの質問が出され、今後の対応として①計画内容に関する関係者への再照会と必要に応じた修正、②実績報告様式案の作成、の2点が決定され、6～7月に再審議される予定である。

会費に関する議論では、役員への報奨として会費減免が可能かどうかについて意見が出された。また、会費納入状況の分析結果が報告され、オーストリアのインフレ率（5%）に伴い、会費が引き上げられていることが共有された。加盟機関による会費未納の問題についても取り上げられ、減損処理への対応や未納理由の調査、会員向け特典の充実、会員増加の施策について、ICと連携して対応する方針が示された。

次に、Buck 常務理事より、広報委員会の報告があり、関連する ToR が提案され、承認された。IUFRO が運用する SNS のうち、X（旧 Twitter）から撤退する一方、Bluesky を新たに開始する予定である。また、IUFRO 本

部の Brigitte Burger 氏からは、新しいウェブサイトについて詳しい紹介があった。

最後に、今後の予定されている拡大理事会をはじめとした主な会議・イベントの日程について情報共有が行われ、2025年から2029年にかけての予定が提示された。次回の拡大理事会は、2029年8月の第27回世界大会の開催にあわせて、ナイロビで行われる予定である。

おわりに

筆者にとっては、昨年6月にスウェーデン・ウプサラで開催された第63回拡大理事会に続き、今回が2度目の出席であった。今回の会議も前回同様、2日間にわたり、毎日朝9時から夕方5時過ぎまで続く長丁場の会議であった。常連の参加者によれば、IUFRO の理事会は毎回このような形式で進行するのが通例とのことである。

前回会合の報告（尾張、2024）でも触れたとおり、IUFRO では毎年の理事会が、本部による各ユニットの活動進捗を管理する手段として機能している。理事会を通じて、各ユニット長がその職責を適切に果たしているかどうか、組織的に確認される仕組みとなっている。一方で、多数の役員が一堂に会するこの機会は、各ユニット長による IUFRO 活動への貢献を称え、その労をねぎらう場としての側面もあわせ持っているように感じられた。

今回の拡大理事会でも、休憩時間には出席者同士の活発な交流が見られ、全員で集合写真（写真-2）を撮影するなど、終始和やかな雰囲気の中で進行した。また、会議の合間には、「○○の分野に詳しい日本の研究者はいないか」といった質問を受ける機会も多かった。中国の CAF に見られるように、日本においても若手研究者が IUFRO の役職により多く参画できるよう、制度的に



写真-2 IUFRO 拡大理事会の参加者（IUFRO 提供）

後押しする仕組みが整備されることが望まれる。

最後に、本会議の企画・準備にご尽力いただいた
IUFRO 本部関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

尾張敏章 (2024) 第 63 回 IUFRO 拡大理事会報告. IUFRO-J
NEWS 136 : 1 ~ 3

ISWST2025 開催報告

東京大学大学院農学生命科学研究科 藤澤秀次

1. 開催概要

第 8 回国際木材科学技術シンポジウム (ISWST2025: International Symposium on Wood Science and Technology 2025) は、2025 年 3 月 17 日 (月) から 19 日 (水) にかけて、宮城県仙台市の仙台国際センターにて開催された (写真 -1)。本会議は、The Japan Wood Research Society (日本木材学会) の創立 70 周年を記念し、2025 World Wood Day Symposium および The Seventh IUFRO Forest Products Culture Colloquium のセッションを併催する形で実施された。

本会議では、木材科学および木材文化に関わる幅広い分野の研究者が一堂に会し、最新の研究成果を共有しつつ、将来の展望について活発な議論が行われた。

2. 参加者および発表件数

世界 24 か国から総勢 417 名 (うち外国人参加者 94 名、学生参加者 143 名) の研究者・技術者が参加し、以下の発表が行われた：

- ・口頭発表 (一般) : 140 件
- ・ポスター発表 : 147 件
- ・記念講演 : 1 件 (Prof. Junji Sugiyama, Kyoto University)
- ・基調講演 : 2 件 (Prof. Emma R. Master, University of Toronto; Dr. John Parrotta, IUFRO, 写真 -2)



写真 -1 ISWST2025/ 第 75 回日本木材学会大会の看板。

写真 -2 基調講演の様子 (上 : Dr. John Parrotta, IUFRO, 下 : Prof. Emma R. Master, University of Toronto)

Report on ISWST2025

FUJISAWA Shuji, The University of Tokyo

・招待講演：14 件

3. セッション構成と招待講演者

本会議では、以下のセッションにて多岐にわたるトピックが議論された。各セッションの招待講演者は以下のとおりである。

1. Wood Physics: Prof. Satoru Tsuchikawa (Nagoya University, Japan)
2. Timber Engineering: Dr. John Changzhuan Shao (SinoBamboo Culture and Technology Co., Ltd, China)
3. Wood Chemistry: Prof. Tomoya Yokoyama (The University of Tokyo, Japan)
4. Composite Materials and Adhesion: Prof. Chunping Dai (University of British Columbia, Canada)
5. Cell Formation and Wood Structures: Dr. Paavo Penttilä (Academy Research Fellow, Aalto University, Finland),
Prof. Ryo Funada (Tokyo University of Agriculture and Technology, Japan)
6. Biodegradation and Preservation of Wood: Dr. Andrew H. H. Wong (International Wood Culture Society)
7. Biorefinery and Bioeconomy: Prof. Fei Song (Sichuan University, China)
8. 2025 WWD Symposium & IUFRO Forest Products Culture Colloquium Session: Dr. Elisabeth Johann (Austrian Forest Association, Austria),
Dr. Michael Grabner (Senior Scientist, University of Natural Resources and Life Sciences Vienna, BOKU, Austria)

9. Wood in Health and Wellness: Prof. Anders Q. Nyrud (Norwegian University of Life Sciences, Norway)

4. 記念講演、社会イベントと交流の促進

3月17日夕刻には、退官を迎えられる京都大学・杉山淳司教授による記念講演が行われた（写真-3）。講演タイトルは“Learning from wood again”であり、長年にわたり木材の構造解析や計測技術の開発に携わってきた杉山先生が、改めて木材から学ぶことの意義や自然素材との向き合い方について深い洞察を共有された。続いて、仙台緑彩館にて開催されたウェルカムパーティーでは、国内外の研究者が活発に交流した。

3月19日午後に開催された Audio Visual Experience by Ms. Priya Parrotta も大きな注目を集めた。音楽と映像を



写真-3 京都大学・杉山淳司教授による記念講演



写真-4 ポスター賞授与式の様子



写真-5 船岡さくら太鼓の様子



写真-6 鏡開きの様子

通して、森林・木材にまつわる多様な文化的価値や物語を体感的に伝えるセッションであり、参加者は作品を通じて木材の持つ美しさと人との関わりの深さを再認識する貴重な機会となった。また、クロージングセレモニーにおいてポスター賞授与式およびハイライトビデオ上映が行われ、会議の幕を閉じた。

全ポスター発表の中から、各セッションにおいてとくに優秀と認められた15件の発表に対して、ポスター賞が授与された。授賞式は、最終日のクロージングセレモニーにて実施された（写真-4）。

なお、懇親会は第75回日本木材学会大会との合同開催であり、地域色豊かな催しとして、以下の二つのイベ

ントも実施され大いに盛り上がった：

- ・船岡さくら太鼓：陸上自衛隊船岡駐屯地の皆様による力強い演奏が披露された（写真-5）。
- ・鏡開き：参加者全員で日本の伝統文化を体験し、交流を深める機会となった（写真-6）。

5. 総括

ISWST2025は、木材科学の学術的発展に寄与するとともに、若手研究者の育成と国際的なネットワークの強化において、非常に有意義な国際会議であった。本会議の開催にあたり参加者の皆様に心より感謝申し上げたい。

The International Oak Symposium への参加報告

北海道大学 吉田俊也，仲谷朗，原谷日菜

はじめに

木材資源と生態系サービスを数千年にわたって人類に提供してきた温帯林の代表的な樹種群、オーク（*Quercus*）。その持続可能な利用に関して、気候変動やそれに伴う攪乱レジームの変化、あるいは外来種の影響といった複雑で困難な課題が世界的に顕在化している。そのような課題への対応を目的として、2024年10月7～10日の4日間、IUFROのWorking Party 1.01.06 “Ecology and silviculture of oak”の国際研究集会 “International Oak Symposium” が米国テネシー州ノックスビル（会場：Hotel Hilton Knoxville）において開催された（主催：テネシー大学、米国農務省森林局）。副題

の “Science-based Management for Dynamic Oak Forests” に示されるようは、オークを含む生態系の維持・回復にむけて、研究者と資源管理の実務家との意思疎通・情報交換を促進する位置づけのシンポジウムである。

研究発表

地元アメリカを中心に延べ11か国から240名の参加者が集まり、100件を超える発表（口頭80＋ポスター30ほど）が行われた（写真-1, 2）。12件の基調講演では幅広いトピックが取り上げられたが、中心的だったのは北米におけるオークの衰退に関する話題であった。衰退は広く mesophication（*Quercus*, *Pinus* などの減少と

Report on the International Oak Symposium

YOSHIDA Toshiya, NAKAYA Akira, HARATANI Hina, Hokkaido University



写真-1 口頭発表の会場

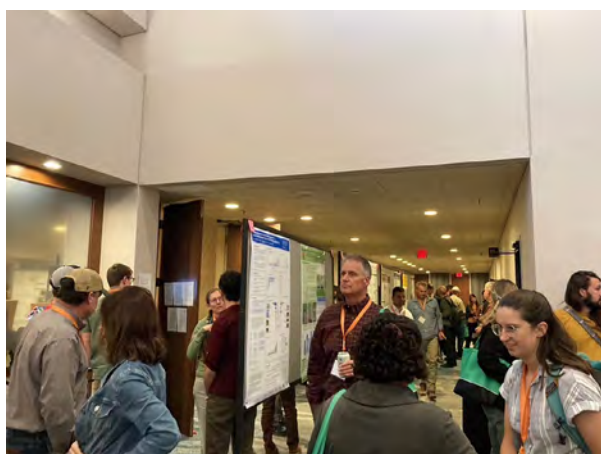


写真-2 ポスター発表の会場

Acer, Fagus, Prunus などの増加を指す)と呼ばれ、気候変動(気温の上昇や干ばつ)や土地利用変化による山火事減少との関係性についての分析が示された。また、そのような知見をもとにした適応的な管理方法、および育種・ゲノミクスからの対応策についても話題提供があった。一方、木材産業の実務家からは、北米におけるオークの利用(とくに樽用材)についての歴史的経緯と現状の概説、長期的に持続可能な資源管理を確保するための産官学の取り組み(White Oak Initiative)が紹介された。全体に、地元米国の話題が中心ではあったが、広く欧州の状況との比較、各地の特徴的な資源管理の事例も示された。

一般の口頭発表は3つの会場を用いて12のセッションで行われた。大きくまとめると、造林(14件)、生態(12件)、計画(19件)、遺伝育種(6件)、保護(13件)、経済(5件)の内訳であった。さらに、オークの研究者とステークホルダーの両社による「炭素」と「火災」関



写真-3 伐採試験地の説明

するパネルディスカッションや、オークの再生ポテンシャルを評価するシミュレーションモデルのワークショップも盛り込まれていた。筆者の発表は、ミズナラの択伐(吉田)、更新(原谷)、材特性(仲谷)に関する内容で、近年のナラ枯れ、ササ枯れ、木材価格の高騰などの目を引くトピックも交えて北海道のミズナラ資源の現況と課題を紹介した。

エクスカーションなど

開催地のノックスビルは、アパラチア山脈の南部を起源とするテネシー川の中流域に位置し、18世紀後半以来の歴史をもつテネシー州第3の都市(人口18万人)である。開会式およびレセプションにおいては地元のアーティストの音楽演奏もあり、南部の豊かな文化を垣間みた。

会期の3日目、エクスカーションに充てられた10月9日は快晴のフィールド日和に恵まれた。3つの選択肢の中から、とくに森林管理に焦点を当てたコースに参加した。目的地はノックスビルから西方30kmほどに位置するテネシー大学の農業研究教育センターが管理する2箇所の森林。センターの本部があるOak Ridge Forestには樹木園や歩道が整備されており、伐採のデモンストレーションエリアが設けられていた。そこでは、伝統的に多く用いられてきたDiameter-Limit Cutting(一定の直径—たとえば40cm—以上の商業価値をもつ立木を一時に伐採する方法)の得失を示しながら、その改善策、施業によって劣化した林分の改良が実践されていた(写真-3)。また、オークの更新を促すためのShelterwood、その代替としてのIrregular Shelterwood(更新の確度を高めるためギャップ形成を段階的に行う)の効果の検証も取り組まれていた。もう一か所のCumberland Forestでは、山火事による更新試験のほか、多数のオーク種の植

栽試験，混交林を指向する観点からのオークと多種との種間競争の試験が行われていた（写真-4）。

気候条件や攪乱レジーム，下層植生など日本とは多くの違いがあるものの，施業システムや更新方法，あるいは資源管理の仕組みから，今後の研究・実践にむけて多くの示唆を得ることができた。

おわりに

この Oak Symposium，過去に IUFRO によるオークの国際会議は複数回あったものの，確立されたシリーズとしての開催ははじめであったとのこと。日程の最後には，第2回のシンポジウム（2027年に開催の方向）についての検討も行われた。今回，参加者全体の約4割が学生またはキャリア初期の専門家であったことは先に向けて喜ばしい。ただ，アメリカ・ヨーロッパ諸国以外からの参加者が限られていた（アジアからは私たち3名の

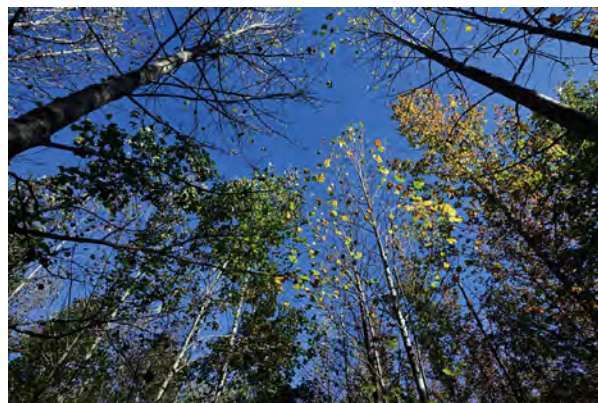


写真-4 オークの混交試験地（ポプラ，フウ，サクラ）

み）ことから，今後はより多くの地域から研究者・実務家が集う機会となることを期待したい。

26th International Wood Machining Seminar (IWMS26) 参加報告

森林総合研究所 木材加工・特性研究領域 松村ゆかり

はじめに

国際木材機械加工セミナー（International Wood Machining Seminar）は，木材機械加工分野の研究者や木材加工業・木工機械工業に従事する技術者たちが，木材切削工具，木材製品，木材加工に関する研究成果を発表し，議論する場を提供することを目的として1963年にアメリカのカリフォルニア州立大学バークレー校で始まった。これまで，北米，欧州，アジアの各地域で開催されており，日本でも，京都（1995），松江（2003），つくば（2013），名古屋（2023）で計4回開催されている。筆者は2025年4月にイタリアのフィレンツェ大学で開催された第26回国際木材機械加工セミナーに参加する機会を得たので，その概要を報告する。

セミナーの概要

フィレンツェ大学農業・食品・環境・林業学部（DAGRI）とイタリア国立研究評議会（CNR）のバイオエコノミー研究所（IBE）の主催で開催された今回のセミナーには，11か国から78名の参加者があり，7件の基調講演，31件の口頭発表，9件の展示発表が行われた。セミナーの冒頭では，IUFRO 5.04.00 Wood processing 及び 5.04.08 Sawing, milling and machining の

コーディネーターから部門の紹介と最近のウェビナー開催等についての活動報告があった。

基調講演では，ヨーロッパの森林資源やイタリアの木材産業，木材加工機械の世界市場等について紹介された。口頭発表は，Cutting mechanics（切削機構），Cutting force and power（切削力），New tools and machines（新しい工具と機械），Chipless manufacturing processes（非切削加工技術），Sensors and quality（センサーと品質），Process optimization（加工の最適化），Environmental and market issues（環境と市場における課題）の7つのセッションで行われた。AIを活用して切削機構をシミュレーションする発表や，生産工程における品質管理技術や最適化に関する発表，イタリアの木材関連企業の開発技術に関する発表等があり，測定手法や分析方法に関する新しい知見と，生産現場での技術の実用化について幅広い情報を得ることができた。会場の Aula Magna は，天井画や彫刻の美しいルネサンス建築の講堂で，学会発表を聴いていることを忘れてしまいそうな雰囲気であった（写真-1）。

ポスターは中庭を囲む場所に展示され，コーヒープレイクやランチの時間に議論された。学会期間中は，雨が降っている時間が多かったものの，美味しいランチやエ



写真-1 口頭発表会場の様子

スプレッソをお供に、参加者間の交流と活発な質疑が行われた。筆者は、スギ大径材の製材・乾燥工程の違いが製材品の曲がりを与える影響についてポスター発表し、日本の製材工場に製品を納入している木材乾燥機メーカーからの参加者等と情報交換をすることができた。

ポストセミナーツアー

セミナー後の4月16～17日に開催されたポストセミナーツアーでは、木質廃材からパレット用ブロックを生産する工場（Ecobloks）（写真-2）、塗装やデジタル印刷等の表面仕上げ加工機械・プラントのメーカー（ceffa）、木材加工分野における機械・生産システム開発企業（SCM）およびその顧客である家具・内装メーカーを視察し、チップからの異物除去技術、最新のデジタル印刷技術、安全に配慮した機械開発（写真-3）やオンラインでの機械稼働状況モニタリング等について説明を受けた。

おわりに

本セミナーは、木工技術協会や家具産業連盟、木材加



写真-2 木質廃材から製造したパレットブロック（Ecobloks）



写真-3 高度な安全機能を備えた丸鋸盤（SCM）

工機械メーカー等から後援を受けており、企業の技術者による研究発表や参加も多く、イタリア国内の関連産業界との連携が印象深かった。また、当分野の将来を担う研究者を奨励するため、本セミナーで初めての学生・若手向けの優秀発表賞が設けられ、2名の学生に授与された。次回の第27回国際木材機械加工セミナーは、2027年にフランスのクリュニーで開催される予定である。

謝辞

本セミナーで発表した研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「大径材の活用による国産材製品の安定供給システムの開発」JPJ012040の補助を受けて行った。

IUFRO-J 2024（令和6）年機関代表会議

令和7年3月18日（火）13時よりオンライン会議で「IUFRO-J 2025（令和7）年機関代表会議」を開催しま

した。その結果、議案は承認されました。以下、代表会議で審議、承認された議題の概要を報告いたします。

議題 1. 2024 年度会務報告

1-1. 一般会計事業

1) IUFRO-J NEWS 発行

No.136 (2024 年 7 月)

- ・第 63 回 IUFRO 拡大理事会報告 東京大学大学院 農学生命科学研究科 尾張敏章
- ・「Role and Fate of Forest Ecosystems in a Changing World」参加報告 東京農工大学 渡辺 誠, 田中 亮志, 徐 懋
- ・Plant and Animal Genome 31 への参加報告 森林総合研究所林木育種センター 永野聡一郎, 平尾 知士, 森林総合研究所林木育種センター 東北育種場 三嶋賢太郎
- ・「第 6 回 IUFRO Working Party 2.09.02 ロトルア, ニュージーランド 2024 国際会議」に参加して 森林総合研究所 樹木分子遺伝研究領域 丸山 E. 毅
- ・IUFRO-J 2024 (令和 6) 年機関代表会議 報告
- ・IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領

※ IUFRO 本部ウェブサイトでの案内: <https://www.iufro.org/publications/iufro-japan-news-no-136>

No.137 (2025 年 1 月)

- ・第 26 回 IUFRO 世界大会参加報告 宇都宮大学 農学部 山本美穂
- ・第 26 回 IUFRO 世界大会 2024 参加報告 宮崎大学 農学部 平田令子
- ・「IUFRO World Congress 2024」で森林放射能セッションを開催: 世界のハブとしての日本の役割 森林総合研究所 立地環境研究領域 / 生物多様性・気候変動研究拠点 (併任), 東京大学大学院 農学生命科学研究科 橋本昌司
- ・IUFRO World Congress 2024 参加報告 森林総合研究所 林業工学研究領域 有水賢吾
- ・第 10 回太平洋地域木材解剖学会議 (The 10th Pacific Regional Wood Anatomy Conference) 開催報告 森林総合研究所 木材加工・特性研究領域 山岸松平
- ・The 10th PRWAC 参加報告 森林総合研究所 木材加工・特性研究領域 平野 優
- ・国際森林研究機関連合第 7 部会 合同会議 森林における食葉性昆虫, 侵入性害虫, 昆虫・病原菌の生物学的防除に取り組むための理論と実践 開催報告 国際森林研究機関連合第 7 部会 合同会議 運営委員会 委員長 (森林総合研究所) 加賀谷悦子
- ・国際森林研究機関連合第 7 部会 合同会議 森林に

おける食葉性昆虫, 侵入性害虫, 昆虫・病原菌の生物学的 防除に取り組むための理論と実践 参加報告 森林総合研究所 森林昆虫研究領域 特別研究員 上森教慈

- ・アジア太平洋地域林業研究機関連合 (APAFRI) 第 10 回総会に参加して 森林総合研究所 理事 (研究担当) 坪山良夫

- ・IUFRO INFORMATION
- ・事務局からのお知らせ

※ IUFRO 本部ウェブサイトでの案内: <https://www.iufro.org/iufro-news/iufro-japan-news-no-137>

2) IUFRO 関連研究集会事務局・参加助成

申請 0 件

助成 2 件

- (1) 国際森林研究機関連合第 7 部会合同会議 (2024 年 8 月 21 ~ 23 日開催): IUFRO-J NEWS No. 137 に開催報告を掲載
- (2) 第 10 回太平洋地域木材解剖学会議 (2024 年 9 月 10 ~ 14 日開催): IUFRO-J NEWS No. 137 に開催報告を掲載

3) 研究集会の後援

助成を伴わない後援はなし

4) IUFRO 本部との連携

- (1) 2024 年から 2029 年までの IUFRO 国際評議会に参加する新たな日本代表および代理について, A 会員からの承認を得て決定し, IUFRO 本部へ報告した。
- (2) IUFRO が発信する情報等を, IUFRO-J ウェブサイトの「新着情報」に逐次転記し, 周知した。 <http://www.ffpri.go.jp/labs/iufroj/>
- (3) IUFRO 本部事務局長からの依頼により, 海外企業との連携に関して IUFRO-J 会員へ情報提供を行った。

5) IUFRO-J 活動の普及啓発

- (1) IUFRO-J の活動を国内外のより多くの人に紹介するため, IUFRO 本部ウェブサイトでの IUFRO-J NEWS の発行案内用として, IUFRO 本部の広報担当者に PDF ファイル (No. 136, 137) を提供した。
- (2) IUFRO-J NEWS 冊子体を関係機関の図書館等 (林野庁, 国際緑化推進センター, 国際協力機構, 国際農林水産業研究センター, 地球環境戦略研究機関) に寄贈した。
- (3) ISSN 日本センター (国立国会図書館収集書誌部 逐次刊行物・特別資料課) に IUFRO-J NEWS 発行毎に, 2 部送付した。

(4) 会員外への情報発信の一環として、発行後1年を過ぎたIUFRO-J NEWSを、ウェブサイト上にPDFファイルとして公開した。<http://www.ffpri.go.jp/labs/iufroj/iufro-j%20NEWS.html>

6) 会員内の情報共有

必要事項について、IUFRO-Jのメーリングリストを通じて配信を行った。例年、会員から申し出のあった企画の案内や調査への協力などを周知しているが、本年度は申し出がなかった。

各メーリングリスト送付範囲は以下の通り：

[iufro-j_rep] 機関代表者および連絡員

[iufro-j_c] C会員（個人会員）

[iufro-j] 事務局にメールアドレスを連絡頂いている全IUFRO-J会員

7) その他

特になし

1-2. 2024年度役員

議長 中静(浅野) 透 (森林総合研究所)
 監事 石塚 森吉
 光田 靖 (宮崎大学)
 幹事長 平井 敬三 (森林総合研究所)
 幹事 浅野 志穂 (森林総合研究所)
 主事 原山 尚徳 (森林総合研究所)

[参考] IUFRO国際評議員会日本代表(2024～2029)

代表 中静 透 (森林総合研究所)
 代表代理 坪山 良夫 (森林総合研究所)

1-3. 2024年度会員数

A会員：15機関 計364名（会員数前年度比：2機関退会，34名減）

B会員：11機関 計20名＋6口（会員数前年度比：1機関退会，3名減）

C会員：18名（会員数前年度比：1名減）

賛助会員：0

議題2. 2024年度(2024.03.01～2025.02.28)会計決算報告

一般会計

【収入】 (円)			
科目	予算	決算	備考
前年度繰越金	2,077,833	2,077,833	
会費			
A会員	400,000	364,000	15機関
B会員	53,000	38,000	9機関
C会員	19,000	17,000	17名
前年度未収分	58,000	58,000	2023年度分会費
次年度前納	0	0	A会員2機関・B会員3機関
雑収入	16	257	受取利息
前年度収入小計	530,016	477,257	
合計	2,607,849	2,555,090	

【支出】 (円)			
科目	予算	決算	備考
情報活動費	220,000	243,876	IUFRO-Jニュース(No.136,137)印刷料・発送料・発送手数料
内訳			
IUFRO-Jニュース136 印刷	100,000	75,768	
IUFRO-Jニュース136 発送	10,000	7,245	発送料5,280＋発送手数料1,965
IUFRO-Jニュース137 印刷	100,000	150,568	
IUFRO-Jニュース137 発送	10,000	10,295	発送料6,320＋発送手数料1,965
通信費	7,000	3,969	郵送費(郵送料・印手代)
会議費	30,000	0	2024年度代明者会議はWeb会議
雑費	10,000	7,791	送金手数料、会議場手配料、受払通知票発行料
助成	400,000	400,000	1. 国際森林研究機関連合第7回合同会議運営委員会 2. 第10回太平洋樹木材料科学会議
前年度支出小計	667,000	655,627	
予備費	1,940,849	0	
次年度繰越	0	1,899,463	
合計	2,607,849	2,555,090	

議題3. 2024年度監査報告

2024年度IUFRO-J事業会計について監査した結果、各帳簿ならびに証拠書類はいずれも、正確に整理・記録されており、本件経理は適正であったことを認める。

2025年 3月9日

IUFRO-J 監事

石塚 森吉

署名 石塚 森吉

2025年 3月6日

IUFRO-J 監事

宮崎大学 農学部

光田 靖

署名 光田 靖

議題4. 2025年度事業計画案

一般会計事業

1) IUFRO-J NEWS 発行

No.138 (2025年7月)：機関代表会議報告，集会報告，

IUFRO INFORMATION, IUFRO 関連集会カレンダー, IUFRO-J 事務局からのお知らせ

No.139 (2026 年 1 月): 集会報告, IUFRO INFORMATION, IUFRO 関連集会カレンダー, IUFRO-J 事務局からのお知らせ

補足:

- ・ IUFRO 及び IUFRO-J の目的や主旨に沿う内容とし, 会員相互に広く共有すべき記事を掲載する。
- ・ 各 80 部印刷し, 冊子体が必要な B 機関と C 会員に配布する。また, 関係者にも広く配布して会員拡大に取り組む。(それ以外の会員には原則 PDF ファイルをメールで配信する。)

2) IUFRO 研究集会事務局・参加助成

2.1) 2024 年選考分: なし

2.2) 2025 年申請分: 12 月末で申請額を集計し選考委員会に諮り, 総額 50 万円程度を助成する。

※助成事業の概要 (詳細は IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領の最新版を参照のこと)

- ・ 助成申請は随時受け付けている。
- ・ 12 月末で集計し, 選考委員会に諮り, 助成対象を決定。
- ・ 具体的内容
- ・ 「IUFRO 関連集会 事務局・参加」 年間総額 50 万円程度
- ・ 事務局: 20 万円/件
- ・ 参加: 10 万円/件目途 (発表は海外に限る, ただし世界大会を含まない。)
- ・ 選考委員会 (4 名で構成) で決定。
- ・ 応募資格: 会費を納入している機関, 会員に限る。
- ・ 助成を受けた者の責務: IUFRO-J NEWS での報告。加えて, 事務局助成の場合は, IUFRO-J の助成があることを研究集会参加者に明示。

※ IUFRO-J 会員に該当者がいないため, 「役員会出席助成」は 2018 年度から事業計画に掲載していない。(詳しくは, IUFRO-J NEWS No.124 掲載の機関代表会議概要報告を参照のこと。)

3) 研究集会の後援

- ・ 研究集会の目的が IUFRO-J の主旨に沿う研究集会について, 広報の支援を行う。
- ・ 後援内容は, 経費の支出をとまわらないものとする。
- ・ 主催者からの申請にもとづき, 事務局で後援を決定, 実施し, 機関代表会議に報告する。

4) IUFRO 本部との連携

IUFRO-J 事務局としてメール等を介して IUFRO 本部との連携を推進するとともに, IUFRO-J ウェブサイトか

ら IUFRO 情報を発信する。

5) IUFRO-J による普及啓発活動

IUFRO-J ウェブサイト等を通じて, IUFRO 及び IUFRO-J 会員の活動を, 国内外のより多くの人に紹介する。

議題 5. 2025 年度予算

予算案立案の基本的な考え方: 単年度収支均衡を心がける。

一般会計予算案

【収入】 (円)

科 目	予 算	備 考
前年度繰越金	1,899,463	
会費		
A会員	364,000	15機関
B会員	50,000	11機関
C会員	18,000	18名
前年度未収分	13,000	B会員2機関、C会員1名
次年度前納	0	
雑収入	16	利息
単年度収入小計	445,016	
合 計	2,344,479	

【支出】 (円)

科 目	予 算	備 考
情報活動費	220,000	IUFRO-Jニュース印刷及び発送手数料
内訳		
IUFRO-Jニュース136印刷・発送	100,000	印刷費
IUFRO-Jニュース137印刷・発送	10,000	発送費 (送料・手数料)
IUFRO-Jニュース137印刷・発送	100,000	印刷費
IUFRO-Jニュース137印刷・発送	10,000	発送費 (送料・手数料)
通信費	7,000	切手代
会議費	30,000	会議室等
雑 費	10,000	事務局運営のための支出 (送金及び金銭振込手数料、受払通知郵便送料等)
助成	0	
予備費	2,077,479	
単年度支出小計 (予備費を除く)	267,000	
合 計	2,344,479	

議題 6. 役員選出, 承認

IUFRO-J 2025 年度役員

役 員 氏名	所 属	区 分 (任期)
議 長 中 静 (浅野) 透	森林総合研究所	現 (3 期目: 2025 年 4 月~)
監 事 光 田 靖	宮崎大学	現 (1 期目: 2024 年 4 月~)
監 事 大村和香子	京都大学	新 (1 期目: 2025 年 4 月~)
幹事長 齋 藤 英樹	森林総合研究所	新 (1 期目: 2025 年 4 月~)
幹 事 永 光 輝義	森林総合研究所	新 (1 期目: 2025 年 4 月~)
主 事 原 山 尚徳	森林総合研究所	現 (1 期目: 2024 年 4 月~)

議長、幹事および監事は機関代表会議で選出し、主事は議長が委嘱。(会則第 11 条)

任期は 2 年とし、再任を妨げない。(会則第 12 条)



◇ 1. IUFRO Annual Report 2024 の発行

2025 年 5 月 20 日、IUFRO Annual Report 2024 が発行されました。2024 年は、スウェーデン・ストックホルムで第 26 回世界大会が開催され、パンデミック後初の大規模対面会議として、110 か国・4,204 名が参加しました。新たに理事会が発足し、初の女性会長としてダニエラ・クラインシュミット氏が就任。次回大会は 2029 年、アフリカで初開催となるケニア・ナイロビを予定しています。報告書では、会議開催実績、出版物、受賞、ポッドキャストなどの活動も紹介されています。Annual Report は IUFRO 本部ウェブサイトよりご覧いただけます。

<https://www.iufro.org/publications/annual-report-2024>

◇ 2. IUFRO 関連国際集会カレンダー

IUFRO 関連の国際集会のうち、2025 年 8 月以降に開催予定のイベントをご紹介します。最新情報については、IUFRO 本部のウェブサイトでご確認ください。

<https://www.iufro.org/events?elementSort=upcoming&viewType=calendar>

8-10 Sep 2025, Everett, WA, USA

2025 IUFRO Small Scale Forestry and Extension and Knowledge Exchange Joint Conference

Research Group 3.08.00, Working Party 9.01.03

<https://forestry.wsu.edu/iufro2025/>

15-18 Sep 2025, Jeju, South Korea

International Conference on Climate Crisis: Conifer Forests at Risk 2025

Working Party 1.01.05, 1.01.09, 1.01.10, 2.02.23

<https://www.cccf2025.com/>

16-18 Sep 2025, Morgantown, WV, USA

The 2025 Council on Forest Engineering Annual Meeting

Division 3.00.00

<https://cofe.org/wv2025/>

17-20 Sep 2025, Cochin, India

5th World Teak Conference 2025: Sustainable Development of the Global Teak Sector – Adapting to Future Markets and Environments

Working Party 5.06.02

<https://www.worldteakconference2025.com/>

22-26 Sep 2025, Průhonice (Prague), Czechia

Forests' Future 2025: Bark Beetle Outbreak in Central Europe – Consequences and Future Challenges

Working Party 7.03.10

<https://www.vulhm.cz/en/forests-future-2025/>

20-23 Oct 2025, Beijing, China

6th IUFRO International Conference on Forests and Water in a Changing Environment

Working Party 8.01.04, Division 8.00.00

<https://www.forestsandwater2025.cn/>

28-30 Oct 2025, Pretoria, South Africa

Intersection of Behavioural / Chemical Ecology and Biological Control in Forest Ecosystems

Working Party 7.03.13, 7.03.16

<https://www.fabinet.up.ac.za/index.php/events/IUFRO2025A>

6-8 Nov 2025, Brasov, Romania

14th International Conference “Wood Science and Engineering in the Third Millennium”

Research Group 5.04.00, 5.05.00

https://www.proligno.ro/en/icwse_home_2025.htm

28-30 Jan 2026, Coimbatore, India

International Conference on Population and Conservation Genetics

Working Party 2.04.01

<https://www.iufro.org/media/fileadmin/science/divisions/div2/20401/ICPCG-2026-Flyer.pdf>

IUFRO 研究集会事務局・参加助成実施要領

対象集会：IUFRO 関連研究集会（参加費助成は、海外での研究集会に限ります。

ただし、世界大会への参加助成はいたしません。

事務局費助成は、事務局が日本にある場合に限りです。）

条 件：IUFRO 本部の会議カレンダーに掲載されるなど、IUFRO の一環であること。

助成金額：事務局：20 万円 / 団体、

集会参加：10 万円 / 人 を目途とします。

応募資格：会費を納入している機関、会員

○会則第 5 条に則り、研究者登録をお忘れなくお願いします。

事務局で会費納入を確認できない方は助成の対象にできません。

○研究集会参加は筆頭発表者に限ります。

募 集：随時受付、規定の申請書※に必要事項を記入し、必要資料を添付して、下記まで電子メール添付にて送付。

〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1 番地
森林総合研究所内 IUFRO-J 事務局 宛
iufro-j@ffpri.affrc.go.jp （2026 年 2 月まで）

iufro-j@ffpri.go.jp （2025 年 9 月以降）

※メールアドレスは 2025 年 9 月から移行開始、2026 年 2 月まで旧アドレス併用可。

※申請書は <https://www.ffpri.go.jp/labs/iufroj/information.html> より入手可能

選 考：12 月末現在で集計し、集計時から 1 年 3 カ月後までに開催される研究集会を選考対象として選考委員会に諮ります。

選考結果：応募者に書面にて連絡。会員には、機関代表会議を通じて報告。

助成時期：原則として集会開催 1 カ月前。

（国際集会の場合、キャンセルになる場合もありますので、できるだけ直前とします。）

備 考：助成を受けた機関・会員には IUFRO-J NEWS への投稿を求めます。加えて事務局助成の場合は、IUFRO-J の助成があることを研究集会参加者に明示することも求めます。

注 意：助成金額はあくまで目途です。IUFRO-J 一般会計の収支状態によって、事務局で勘案いたします。

附 則：平成 9（1997）年 4 月施行通知（IUFRO-J NEWS No.61 掲載）

平成 9（1997）年 7 月 10 日：一部改定

平成 13（2001）年 8 月：一部改定（IUFRO-J NEWS No.73 掲載）

令和 4（2022）年 3 月：一部改定（IUFRO-J NEWS No.132 掲載）

IUFRO-J NEWS No. 138

July 25, 2025

Copyright © 2022 IUFRO-Japan

Published by IUFRO-Japan

Edited by IUFRO-Japan Secretariat

1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687 JAPAN

TEL: +81-29-829-8327

http://www.ffpri.go.jp/labs/iufroj/index_Eng.html (new URL from Jul 2025)

Email: iufro-j@ffpri.affrc.go.jp (until Feb 2026)

New: iufro-j@ffpri.go.jp (from Sep 2025)

ISSN: 2189-5503

IUFRO-J NEWS No. 138

2025 年 7 月 25 日

国際森林研究機関連合日本委員会（IUFRO-J）事務局

〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所内

TEL 029-829-8327（国際連携推進室）

<http://www.ffpri.go.jp/labs/iufroj/>（※ 2025 年 7 月より新 URL）

Email: iufro-j@ffpri.affrc.go.jp（2026 年 2 月迄）

新: iufro-j@ffpri.go.jp（2025 年 9 月以降）〔編集・発行〕
株式会社ソウブン・ドットコム 〔印刷〕